

機関番号：33921

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520309

研究課題名（和文） 日・仏・米における「贅沢」の比較文化史研究

研究課題名（英文） Comparative cultural study of luxury in Japan, France and U.S.A.

研究代表者

山田 登世子 (YAMADA TOYOKO)

愛知淑徳大学・メディアプロデュース学部・教授

研究者番号：90100544

研究成果の概要（和文）：初年度に実施したフランスにおける贅沢研究は、ココ・シャネルというキーパーソンを得て、現地でのフィールドワーク（シャネルが青春をすごした修道院の視察など）が豊かな成果をあげたと思う。また、日本における贅沢の研究も白州正子という対比項を得て、二人を比較しつつ著作『贅沢の条件』にまとめることができた。アメリカについては想定外のリーマン・ショックのため贅沢研究がすすめられる環境がなく、余儀なく割愛した。今後に記したい。

研究成果の概要（英文）：The first fiscal year 2008 was devoted to the investigation of the luxury in France; the key person is Coco Chanel. This study achieved good results in the aspect of on-the-spot inspection of Chanel. The investigation of luxury in Japan focused on Masako Shirasu, a contrasting figure with Chanel. We published a book, *Conditions of luxury*, by comparing the two. Concerning the luxury in the U.S.A., there were not suitable condition on account of the unexpected 'Lehman Shock'. This remains to be investigated in future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,800,000	540,000	2,340,000
21年度	800,000	240,000	1,040,000
22年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：仏文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 「贅沢」は、経済学にあつかう「富」とちがって個々人の主観性が入るので、これまで学術的な研究の対象になることがなかった。この学際的テーマは研究にあたいする。

(2) 茫漠としたテーマにならないように、研究エリアを定めて、日・仏・米における贅

沢を比較研究したい。贅沢というテーマはもちろん、こうした無比較文化史も本研究が初である。

2. 研究の目的

(1) フランス、日本、アメリカにおける「贅沢」について、文化史的アプローチと現代的状況の双方にわたって研究する。

(2) 理論的なアプローチとして、「富」と「贅沢」の対比研究をふくめる。

3. 研究の方法

(1) 理論的把握のために、スミス『国富論』、ヴッブレン『有閑階級の理論』、バタイユ『呪われた部分』をはじめ、贅沢に関連する文化史の文献、さらには贅沢を描いた文学作品をもふくめた文献研究をすすめる。

(2) 初年度は、フランスにおける贅沢の研究を主な目標とし、できれば日本における贅沢研究にもとりかかる。いずれも現地フィールドワークを文献研究とあわせておこなう。次年度以降にアメリカにおける贅沢の研究をおこなって、贅沢の比較研究をすすめたい。

4. 研究成果

(1) 研究すべき基礎文献として、なによりまずアダム・スミス『国富論』を、贅沢との対比を視点にしつつ精読した。さらに必須文献であるヴッブレン『有閑階級の理論』を精読したが、この2著については、九州産業大学教授の高哲男氏とのワークショップによって大いに教えられるところがあった。

また、これまで一度も贅沢論として読まれたことのないバタイユ『呪われた部分』を再読し、これが贅沢論であることを確認できたことも今後の研究課題につながる成果であった。

さらに、贅沢を描いた文学作品としてとりあげた作品のうち、予想以上の成果があったのは、一つにはバルザック『優雅な生活論』である。贅沢の貴族的形態からブルジョワ的形態への移行を論じたこの作品がいわば贅沢論の古典であることを再認識した。

くわえて、ゾラの『金』、『ナナ』、『獲物の分け前』、『ボヌール・デ・ダーム百貨店』といった作品も、現代的消費社会の誕生とブルジョワジーの奢侈・贅沢を活写していて本研究の核となる文献資料であることを確認した。

(2) 初年度のフィールドワークは、フランスにおける贅沢が典型的に見てとれる場所をめざしたが、その場所を定めるキーパーソンとしてココ・シャネルに焦点化した。シャネルは19世紀までの特権階級が享受してきた貴族的贅沢を覆して贅沢革命をおこした人物だからである。

そのシャネルにかんするフィールドワークの場所として、彼女が青春時代をすごした修道院を選んだ。オーベルニュ地方のオバジーヌに建った12世紀以来の修道院は、シート会修道院であり、ことに厳格な戒律と質朴を尊んだので名高いが、視察したオバジーヌ

修道院はまさに厳格な戒律そのまま、一般公開も制限されており、建物のステンドグラスにも色が禁じられていた。「古さ」の威厳を放ち、歳月にすりきれた石段がそのままに残る修道院は、シャネルの贅沢観のルーツをまざまざとあらわして、このフィールドワークは真の贅沢とは何を考えるにあたり、予想以上の成果をあげた。

さらに、シャネルの贅沢観と対照的で、貴族的贅沢の象徴であるヴェルサイユ宮殿の視察をおこなった。その奢侈のスケールの大きさ、奢侈を政治的顕示に使用した劇場的贅沢を視察した。宮殿と庭園の圧倒的な広さのために、一日ですべてをみることはできなかったが、マリーアントワネットの住んだブチ・トリアノンとアモーの館をじっくり視察できたので視察の目的は果たせたと思う。

その広大さもふくめ、顕示的な豪華さに満ち満ちたヴェルサイユはシャネルの現代的贅沢と何から何まで対照的で、比較研究として大いに役立った。

本研究の二大研究トポス(場所)ともいべき二つの場所のフィールドワークにくわえて、南仏プロヴァンス地方の「マス」(mas)と呼ばれる農家を改造した別荘のフィールドワークをおこなった。現代の富裕層の贅沢として注目をあびているからである。

大きなプラタナスの木陰の庭を憩いの場所として使い、プールをもうけ、家具調度に贅を凝らしたプロヴァンスの別荘は、「緑」の環境を贅沢とし、新築ではなく、あえて昔の民家を使うことを贅沢とするヨーロッパの贅沢観をあらわして、大いに学ぶものがあった。

上記にわたるフランスにおけるフィールドワークは予想以上の成果があったと思う。

(3) (1)と並行しつつ、日本における贅沢の研究についても文献研究とフィールドワークをおこなった。

キーパーソンとなったのは、シャネルとある意味で対比的でありつつ同時に共通点のある白州正子である。白州正子の数多い著作のなかでも、『日本のたくみ』、『かくれ里』、『私の古寺巡礼』は贅沢とは何かを考える上で大きな示唆をえた。ことに『日本のたくみ』は、新品をチープなもののみなし、「古さ」を贅沢ととらえていて、シャネルならびにヨーロッパ人一般の贅沢観とほぼ同じであることを検証できたことが大きな成果であった。

その白州正子が住んだ武相荘を視察したが、古い農家を改造した緑濃い住まいは南仏プロヴァンスの別荘をありありとしのばせた。日仏の贅沢観の類似について深く考えさせられた実り多い視察であった。

以上、(1)から(3)までの研究成果を一

著まとめ、『贅沢の条件』として上梓できたのは本研究の最大の成果である。

(4) 2009 年度におけるフランスでのフィールドワークは、パリ 13 大学教授パスカル・プチ氏とのワークショップをおこなった。

プチ氏より、近代社会に支配的な機械制大工業→大量生産・大量消費システムに反する職人生産 artisanal の贅沢さについての報告があり、これをうけて、私の側からも、日本での職人生産伝統とその奢侈・時間の贅沢な使用など、意見交換が白熱した。

日本においてもフランスにおいても、「職人生産」が贅沢であり、その点で日仏の贅沢が共通点をもっていることを確認できた実り多いワークショップであった。

さらにプチ氏から、職人生産 artisanal に特化した図書館の所在を教えられたのも大きな成果であったが、月曜休館のためおとずれる時間がなかったのが残念であった。これについては今後二期したいと思う。

また、ワークショップに先だて、プチ教授をはじめ、CNRS 研究員 R. ボワイエ、パリ 13 大学教授 B. コリヤ氏などの諸氏によるシンポジウム「アジア経済の特性と日本資本主義」が開催された。議論はアメリカのリーマン・ショックが世界経済に及ぼす影響に多くの時間がさかれたが、現代における贅沢を考える経済理論的背景を知る上でたいそう有意義だったと思う。

今回も、2008 年のフィールドワークをひきついで、フランスの修道院のなかでも、巡礼地の出発点として名高いブルゴーニュのヴェズレー修道院を視察した。ロマネスク建築の質朴さとその質朴さのあたえる華美でない贅沢さを体感することができた。

(5) アメリカにおける贅沢研究については、想定外のリーマン・ショックが起り、アメリカが贅沢研究の対象となるにはあまりにも歴史的常態をはずれた非常事態になったので、考えた末に、思いきって贅沢の比較研究からアメリカを外し、この課題は後日に記すこととした。

本研究の遂行にあたったこのことが最も残念なことだが、科研に応募する以前のアメリカとのあまりの政治的経済的事情のちがいが大きすぎるので、やむをえなかった。これについては、今後の課題としたい。

(6) 代替テーマとして、アメリカ的贅沢の一つのテーマである「ロハス」な贅沢を研究しうるテーマおよび場所として、「別荘地」を選んだ。南仏プロヴァンスの別荘との対比も活かしうると考えたのも一因である。

具体的な場所として、伊豆、箱根、軽井沢

を選んだ。

(7) 箱根と軽井沢のフィールドワークであげた成果は、ことに軽井沢において、避暑に適した気候と緑という環境論に大きく目がひらかれたことである。ことに軽井沢は、もともと宣教師がこの地を避暑地として選んだことにあらわされているように、ヨーロッパ人の別荘感覚が日本にそのまま引き継がれていることを確認した。緑多く、空気の良い「環境」が「贅沢」の条件なのである。

ここで得られた認識は本研究の贅沢論に新しい視点をあたえ、次の研究課題がみえてきた。

この意味で収穫の大きいフィールドワークであった。

(8) 伊豆のフィールドワークも、緑・海・温泉という「環境」が贅沢の条件であることを痛感したのは (6) と同じであるが、伊豆で目をひらかれたのは、この贅沢が、シニア世代が理想とするライフスタイルに結びついているということである。

これについては、伊豆の地で、あえて別荘地に永住選んだ家族と面識をえて宿泊体験をし、視察をこえたインタビューなどにふみこみ、またこの地での暮らしを体感したことが大きな力になっている。

それまで東京に暮らしていたが、環境の良さにひかれて伊豆永住を決意し、在宅勤務を続けつつ、自家菜園を手がけて、悠々自適の感のある生活を送っておられるさまにつぶさに接することができた。また、同様のライフスタイルを選んでいる仲間も多いということもきいた。たいてい、定年をむかえた人々で、それまで東京暮らしであったキャリアの女性なども多いという。

高齢化社会をむかえた日本で、まだシニア活力のある世代が環境を重んじる居住を好み、自家菜園や庭づくりなど、自然と共生するエコなライフスタイルを選んでいることがわかり、バブル期の消費の贅沢を卒業したこれからの現代日本社会の贅沢の一つのありかにふれえたのは本研究の小さからぬ成果である。

(さらに、本研究に直接結びつくものではないが、その着想の一つになっているフランス・リゾート論から派生した印象派論を本研究期間中に上梓できたのも成果の一つである)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

① 山田登世子、娼婦論の古典、「機」224 号、

査読無、2010、16-17

② 山田登世子、モード、それは私だ——永遠のシャネル、「COCO」、査読無、2009、36-37

③ 山田登世子、美空ひばりの舟歌がきこえる——阿久悠頌、「環」33号、査読無、2008、4-11

④ 山田登世子、コレット——自転車に乗る少女、「NHKフランス語会話」1月号 第50巻 第10号、査読無、2008、98-101

⑤ 山田登世子、ココ・シャネル——破壊しに、と彼女は言う、「NHKフランス語会話」2月号 第50巻第11号、査読無、2008、96-99

〔学会発表〕(計1件)

① 山田登世子、与謝野晶子——はたらく女、恋する女、2009年10月31日、堺市女性会館

〔図書〕(計3件)

① 山田登世子、『誰も知らない印象派』、左右社、2010、107

② 山田登世子、「学問なき芸術の退屈さ」、山田鋭夫編『学問と芸術』、藤原書店、2009、171-175

③ 山田登世子、『贅沢の条件』、岩波書店、2009、202

〔その他〕

その他

① 山田登世子、時とともに旅する、ラグジュアリーな「夢の箱」の奇跡、「VOGUE」、査読無、2010年8月号、57

② 山田登世子、ブランドは、シュガーのように甘美なもの、「VOGUE」、査読無、2010年8月号、71

③ 山田登世子、映画ココ・シャネルによせて、中日新聞、査読無、2009年7月31日号

④ 山田登世子、共感誘う逆転の思考——シャネル・ブームを読む、朝日新聞、査読無、2009年6月25日号

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 登世子 (YAMADA TOYOKO)

愛知淑徳大学・メディアプロデュース学部・教授

研究者番号：90100544

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし